

学位申請論文

論文要約

テオドール・W・アドルノの教育思想に関する研究

申請者

白銀 夏樹

## I 論文題目

テオドール・W・アドルノの教育思想に関する研究

## II 論文構成

### 序章 問題関心と研究の課題

- 1 問題関心——啓蒙と教育の現在——
- 2 研究の対象と目的
- 3 先行研究の動向
- 4 研究の課題

### 第一章 教育論者としてのアドルノ

- 第一節 アドルノの生い立ちと亡命期の社会批判
- 第二節 戦後ドイツの民主化と教育への関心
- 第三節 教育論者としてのアドルノ

### 第二章 アドルノ教育論の問題意識——自我形成をめぐる社会批判と教育——

- 第一節 アドルノ教育論の社会心理学的な特徴
- 第二節 「脆弱な自我」という問題
  - (1) 「過去の克服」をめぐる防衛機制の批判
  - (2) 「権威に縛られた性格」の批判
- 第三節 「強靱な自我」への期待
- 第四節 自我形成のアポリア
- 第五節 「自我の脆弱化」を回避するための教育

### 第三章 自律への教育——アドルノの思想における自律概念と教育への展開——

- 第一節 自律概念をめぐる近代の教育観とアドルノ
- 第二節 啓蒙に対するアドルノの批判と期待
- 第三節 啓蒙としての教育
- 第四節 カント道徳哲学に対するアドルノの批判
- 第五節 アドルノの道徳哲学
- 第六節 日々の知的営為としての自律と教育

### 第四章 経験への教育——アドルノの思想における経験概念と教育への展開——

- 第一節 主体と客体の「不透明な間」の経験
- 第二節 社会批判と自己省察における経験
  - (1) 社会批判の方法

(2) 社会批判を支えるアドルノの社会観と言語観

(3) 批判的思考の経験

### 第三節 文化産業の中での経験

——テレビ・メディア批判を手がかりとして——

(1) 経験の喪失の現状

(2) アドルノのテレビ批判

(3) テレビをめぐる啓蒙

(4) メディアとしてのテレビの可能性

### 第四節 西洋近代芸術としての音楽の経験とその教育

(1) 西洋近代の芸術理論

(2) 芸術経験における理解と謎

(3) 音楽の特性とその経験

(4) アドルノの音楽教育論

### 第五節 子どもの経験の可能性

## 第五章 自己形成の時間意識——人間形成における自律と経験の意味——

### 第一節 Bildung 概念とその時間意識の問題圏

### 第二節 人間形成をめぐる時間意識の変容

(1) 近代の人間形成論と教養小説的時間意識

(2) 現代の趨勢となった客観的時間意識

### 第三節 絶対的モデルネの時間意識

### 第四節 叙事詩的時間意識

(1) 意図せざる過去の想起

(2) 叙事詩的時間意識

(3) 叙事詩的連続性への志向

### 第五節 自律と経験による自己形成の可能性

## 結章 アドルノの教育思想

### 第一節 総括——自律と経験による自己形成のための教育——

### 第二節 アドルノの教育思想

### Ⅲ 問題関心と研究の課題（序章の要約）

本研究は、ドイツの思想家テオドール W. アドルノ（Theodor Wiesengrund Adorno, 1903-1969）の教育思想を再構成し、啓蒙の批判的継承という観点からその特徴を明らかにするものである。

理性の導きによって理性的な世界を実現しようとした 18 世紀の知的運動である啓蒙（独：Aufklärung、仏：lumières、英：enlightenment）は、幾多の社会思想家の関心を教育に導いた。そして近現代の教育思想と教育実践もまた、この理性概念を中心に、自然、進歩、文化、自由、自律、経験といった概念をその周辺に配置しながら、その歴史を重ねてきた。だが、啓蒙が（完全でないとはいえ）現実となった現在、啓蒙は批判の対象となった。近代科学技術の諸問題、西洋中心主義、進歩史観の限界などへの批判に呼応するように、教育学でも自律から社交へ、経験から体験へ、文化的教養から多文化理解へとといった関心の移動も認められる。しかし現代思想における啓蒙思想の再評価も看過できない<sup>1</sup>。啓蒙への批判と再評価が交錯する現在にあって、啓蒙のめざした理性の実現という主題に立ち返りながら啓蒙と教育の関係を再考することは、教育学のアクチュアルな課題のひとつであるといえよう。

ここで本研究が注目するのは、ドイツの思想家アドルノの思想である。その理由は、啓蒙を徹底的に批判した代表的な思想家のひとりでありながら、自らの知的活動を啓蒙と呼び、さらに啓蒙思想の諸概念を継承した教育論も残していることにある。哲学、社会学、美学などにも及ぶ彼の思想の主題は、近代的な諸概念の歴史的社会的批判であった。とりわけアドルノを有名にしたホルクハイマー（Max Horkheimer）との共著『啓蒙の弁証法』（1947 年）は代表的な啓蒙批判の書として知られ、かつて人類に自然の救済と幸福を約束した啓蒙が、その進歩の帰結として、合理的な人間支配そして第二次世界大戦と反ユダヤ主義に象徴される暴力を招いたとペシミスティックに断じるものであった。他方でアドルノは教育論集『成人性への教育』（邦訳名『自律への教育』、1970 年（死後の出版））に収録された晩年の講演や対談において、「教育に対して最も優先して求められるのは、アウシュヴィッツが二度とあつてはならないということです」と唱え[EzM: 88 = 124]、そのための「自律への教育」「経験への教育」を訴えた。しかし自律と経験を肯定する彼の啓蒙的な教育論と、啓蒙を徹底的に批判した彼の思想との整合性は容易には見出せない。そこで本研究では、哲学、美学、社会学にわたるアドルノの思想全体と教育論とを関係させることで、アドルノの教育思想の再構成を行いたい。彼の教育思想は、理性の実現をめざした啓蒙とそれに与した教育というかつての関係とは異なる教育思想、すなわち啓蒙批判をふまえながらも教育に可能性を見出す教育思想のモデルとなるだろう。

ところで、アドルノに焦点を当てた教育学の先行研究は数多くあるが、本研究と関心を共有するものは管見の限り見当たらない。先行研究の傾向は、アドルノの教育論に焦点を当てるものと、アドルノの思想全体に焦点を当てるものとの二つに乖離している[白銀 2011]。前者に分類される先行研究には、教育実践を導く一般理論としてアドルノの教育論を体系化するもの[Groothoff 1971; Brose 1976]、社会批判とその変革というアドルノの動機を継承して現代の社会と教育を批判するもの[Vgl. Pöggeler 1987; Gruschka 1988; Gruschka 1995; Hilbig 1995; Fehler u. a. 2001; Gruschka 2004; Gruschka 2006; Ahlheim/ Heyl 2010]<sup>2</sup>、そして戦後ドイツの知的状況の中にアドルノの教育論を位置づけようとする思

1 たとえばカントの啓蒙論に対する晩期フーコー（Michel Foucault）の再評価や[フーコー 2002a, 2002b]、近年のハーバーマス（Jürgen Habermas）の自然主義[Habermas 2005a, 2007, 2009a, 2009b]を挙げることができる。

2 このような研究の典型として、「アウシュヴィッツ以後の教育」というアドルノのテーマを継承しながら

想史的研究が挙げられる[Paffrath 1992; Kraushaar 1998; Albrecht 1999a; Albrecht 1999b; Koinzer 2011; 今井 2015]。だが、アドルノの教育論と彼の思想全体との関係を詳細に検討したものは見当たらない。他方でアドルノの思想全体に注目する研究として、かつてはアドルノの科学批判に注目するものもあったが[Althaus 1976; Herrmann 1978]、現在では主体の学び・変容・成長を主題とする人間形成論 (Bildungstheorie) としてアドルノの思想を再構成する研究が主流である[Kappner 1984; Gebauer/Wulf 1992; 今井 1998; Schäfer 2004; 池田 2015]。教育論にとらわれることなくアドルノの思想全体を俯瞰したこれらの研究は、その多くがアドルノの経験概念に焦点を当てているように、本研究にとっても看過できない成果をあげている。しかし再構成された人間形成思想がアドルノ自身の教育論とどのように関係づけられるのか、検討が不十分である。

しかし近年のアドルノ研究では遺稿集の調査や公刊が進み、カントの自律概念の継承や文化的保守主義者というイメージを変える彼の文化理解が明らかとなった。本研究はこの近年の研究成果を参照し、さらにアドルノの肯定的な啓蒙理解を示す未公刊資料を利用することで、先行研究の乖離を架橋する。

#### IV 論文の要約 (第一章～第五章の要約)

##### 第一章、第二章：「自我の脆弱化」の契機を教育から除去すること

ここでは、アドルノの来歴を教育論者という観点から振り返ったうえで、彼の教育論の中心的な主題であった「脆弱な自我」への批判、そして教育への実践的提言の特徴を明らかにした。彼の教育への関心の根底には、アメリカ亡命中の『権威主義的パーソナリティ』と帰国直後の『グループ実験』という社会心理学的研究によって明らかにされた「脆弱な自我」への批判があった。アドルノはフロイト的な精神力動論と社会の合理化の観点から、他人への感情的なつながりが欠落し、ステレオタイプに従い、合理的な管理と処理に快楽を覚える「操作的性格」、あるいは権力の有無に腐心し大勢順応主義と自己省察の欠如を見せる「権威に縛られた性格」を批判し、その根底に「脆弱な自我」を見出した。

この問題の克服のためにアドルノは教育に期待するのだが、その論理は特異である。「脆弱な自我」を批判するならば、それに代わる「強靱な自我」をめざし、それを実現するための教育を行うのが一般的な教育学的な論理であろう。しかし彼の教育論を詳細に分析すると、アドルノの提言の焦点は、「強靱な自我」の形成よりも、むしろ学校などで働く「自我の脆弱化」の諸契機の除去と、それに代わる穏当な教育実践の提案にあったことがわかる。たとえば「これがここのやり方だ」と学校のルールが強制される入学時のショックの除去、暴力と如才なさで上下関係の決まる生徒の徒党の批判とそれに代わる個人間の友情や言語表現能力の鼓舞、そして自己と他者のコントロールに腐心するのではなく、自他の衝動や過ちにも寛容な教師の姿などをアドルノは提案した。学校内の権威に関して、学校組織・学級集団・教師などの既存の権威の除去を訴える一方で、教育内容の権威や「野蛮」の回避の最終手段としての権威に限っては肯定した。ここから、大人の作為的介入の限界と子どもの自己形成の余地を認めながら、教師も自己統御に腐心せず、ただし「野蛮」に限っては禁止するという教育実践的な示唆を得ることができた。それとともに、理想的人間像からではなく回避されるべき現状の教育から出発するアドルノの教育論の独自性が見出された。

---

ら、独自の批判を展開する研究も多い[Vgl. Meseth 2001; Ahlheim 2010]。

### 第三章：現代における「他律の回避」としての「自律への教育」

アドルノは教育の理念として自律を掲げ、子どもだけでなく大人も対象とした自律への教育を肯定的な意味で啓蒙と呼んでいた。しかし彼にとって自律とは、普遍的な規則で自らを律する自己統制を必ずしも意味していない。ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』において、啓蒙は人類史の起源から反ユダヤ主義や文化産業にまで通じる自然支配の原理と批判されていたが、それを脱する可能性は「啓蒙による啓蒙の救済」に賭けられていた。そして教育論におけるアドルノは、その具体的な実践として、「社会批判＝自己省察」を促す教育を提唱し、人々を縛り反ユダヤ主義などへと誘うメカニズムが広く人々に意識化されることを求めている。

しかし本章ではカントの批判的読解を経たアドルノの道徳哲学に注目し、彼のいう自律がこのような意識化にとどまるものではないことを明らかにした。アドルノは、自律を人間の自然的本性に基づく実現可能な理性的状態であるとみなし、そこから道徳的行為を導き出すことはしなかった。彼によれば、現代において自律を自負する人であっても、社会的に与えられた選択肢の中で判断を下しているにすぎず、その判断の基準も経済的効率や文化産業の供給する印象に左右されており、結局は社会的なものに従った他律の状態にある。さらにこの誤認された自律は、暴力の起源である自己正当化にも通じる。そこでアドルノは他律を完全に脱した自律の状態を彼岸の理念とみなしたうえで、此岸の現状における自律は他律の回避の営為とならざるをえないとした。まず社会的現状の強制は圧倒的なため、それへの同調を完全に拒否することはできないが、しかしこの強制の中での身体的な苦痛は、否定的な衝動として現状に対する「社会批判＝自己省察」の契機となる。さらにここから、日常の生において悪と非人間性の回避に努め、自己正当化という暴力の起源から距離をとり、常に自分が誤りうるという謙虚さの道徳が示唆される。さらに道徳的判断に伴う矛盾や葛藤の内部に囚われるのではなく、現状の選択肢の外部へと目を向け、この矛盾や葛藤を強いる社会的現状そのものを変えようとする展望が開かれる——このようにアドルノは現代的な自律を考えていた。アドルノの「自律への教育」とは、「社会批判＝自己省察」を契機として、現状の外部への志向に支えられた他律の回避の営為を求める「抵抗への教育」であった。

### 第四章：「不透明な間」の契機を探る「経験への教育」

アドルノは教育論において自律への教育と経験への教育は同一であると述べていた。しかし彼の哲学や美学をふまえると、彼のいう経験とは、日常においても認識や思考においても透明な合理性が強制となった現状において、主体と客体との関係の中で「不透明な間」が立ち上がり、現状の只中であってその外部の可能性が感知されることであったといえる。この章では、こうしたアドルノの経験概念を検討し、その教育への示唆を明らかにした。

まず、前章で扱った「社会批判＝自己省察」という思考の営為にアドルノが経験を見出していたことを明らかにした。言語の伝達性（透明な概念性、論理性など）と表現性（不透明な物質性、感覚性など）という二面性に着目したアドルノの言語哲学をふまえるなら、合理化された社会を論理的に説明することと、矛盾に満ちた表現で矛盾に満ちた社会を表現することの双方が、「社会批判＝自己省察」の営為においては必要となる。またこの思考の営為の中では、思考と事柄、思考主体と言語との「不透明な間」での経験が開かれ、主体は「めまい」に襲われながら現状への細やかなかわり、そして現状とは異なるものへの志向や実践へと誘われる。これをアドルノはヘーゲル哲学を参照しながら「非同一性の意識」と呼んだ。透明な合理性と不透明な強制が結びつく現状の只中での「不透明な間」の経験は、「非同一性の意識」に支えられることで、現状の外部への志向を拓く——ここにアドルノの期待を認めることができた。

続いて現代文化の中での経験として、アドルノのテレビ批判に注目した。アドルノは同時代の「経験の喪失」の一翼を担うテレビの現状を批判し、それを意識化する啓蒙としての教育を呼びかける一方で、テレビを有効に活用した授業の意義や、テレビ独自の芸術作品の可能性も示唆していた。受像機の小ささや再生の手軽さなど、技術の進歩によって可能となったテレビの物的な特性は、視聴者にとって「不透明な間」として立ち現れることがある。技術の進歩は「経験の喪失」に加担するだけでなく、また新たな経験の契機をもたらしうる——現代文化における経験の可能性についてもアドルノは見定めていた。

さらにアドルノが経験のモデルとみなしていた近代芸術をめぐる経験と教育の関係について考察した。宗教的価値や装飾的価値から離脱し自律化した西洋近代芸術の作品は、歴史を宿した素材と制作主体との緊張関係によって織りなされ、社会における自然支配の似姿であると同時に社会から相対的に自立してもいるとアドルノはとらえていた。さらにアドルノは、このような経験は音楽作品に顕著なように、謎めいたものを伴わざるを得ないとして、その謎の輪郭を精確に浮かび上がらせる構造的な聴取とそれを支援する音楽教育を求めた。ただしアドルノのいう音楽教育は、鑑賞の主体と作品との間の「不透明な間」を浮かび上がらせる一方で、作品の経験の果てにある「質的な跳躍」を約束するものではなかった。

本章の最後に、アドルノがそうした跳躍の可能性を、子ども自身や子ども—大人関係に認めていたことを明らかにした。アドルノは「社会批判＝自己省察」や芸術経験において子どもがしばしば見せる「質的な跳躍」に注目し、大人にとっての経験のモデルになるとした。ただし大人は認識の労苦を伴う営為によって「質的な跳躍」に近づくが、子どもは「質的な跳躍」の前提となる認識の個々の正確さに乏しい。ここから、経験に輪郭を与えながら子どもの経験能力それ自体を尊重する教育の意義とともに、子どもと大人の「不透明な間」の経験の契機、そして対等な社会的主体同士の連帯というアドルノの教育思想の射程を読み取ることができた。

「社会批判＝自己省察」は、思考の中で、思考と共に生起する経験を含んでいる。最新技術によって失われる経験もあれば、そこで新たな経験が生まれることもあり、また近代芸術はそうした経験のモデルとして注目される。その経験の先には教育不可能な「質的な跳躍」が認められるが、それは子どもにとっては近しく、また大人と子どもの間でも生起しうる——このような「不透明な間」をめぐるアドルノの経験概念が明らかとなった。

## 第五章：自己形成の駆動する時間意識

これまで明らかにしたアドルノの自律概念と経験概念は、いずれも日常に間欠的に介入する営為を示すものである。しかし教育という観点からは、個々の営為が人間の成長ないし発達という時間の連続的な経過の中でどのように位置づけられるか明らかにされねばならない。そこで本章では、時間の連続性をめぐるアドルノの洞察を手がかりとして、人間形成の時間意識の思想を再構成した。

アドルノによれば、かつての伝統的な *Bildung* 概念は個人と社会的全体の動的な調和的發展を含意していたが、今やそれは成立しがたくなり、蓄積された諸特性を点のような自我が社会への適応のために使いこなすだけになっている。これは *Bildung* 概念を支えた動的な教養小説的時間意識に代わって、静的な客観的時間意識が支配的になったことの現れだとされる。それに対して、アドルノは時間芸術として独自の発展を遂げたクラシック音楽作品に異なる時間意識を認めていた。ひとつは、過去とは異なるオリジナリティを追求しようとする「絶対的モデルネの時間意識」であり、伝統に対する反発によって駆動する。もうひとつは「叙事詩的時間意識」であり、完結した全体性を欠いたまま過去と現在と未来が重層的に布置連関を組み替え続ける時間意識である。記憶、無意識、自我といった人間形成の諸概念を駆使しな

がらアドルノはこの二つの時間意識を論じ、静的な客観的時間意識の支配的な現状の只中で、過去を記憶にとどめながら未知の未来を志向する動態性の可能性を示そうとした。

この時間意識論を自己形成の時間意識論としてとらえるならば、アドルノのいう自律と経験の営為は、個々の営為の只中で他の諸営為との（過去への反発であれ重層的であれ）関連を求め、過去と未来との動的な関係に拓かれていくものであったといえる。さらにここでの過去と未来は個人のレベルに完結するものではなく、社会的なものでもある。現在における個人的・社会的な過去の想起から、現状とは異なる未来への志向を個人的・社会的に喚起すること——ここに個人の自己形成と社会との関係の動態化を認めるアドルノの思想は、**Bildung** 概念を現代的に継承するものだったといえる。

## V 結章の要約（アドルノの教育思想）

ここではアドルノの教育思想を再構成するため、第一節ではアドルノにおける啓蒙批判とともに教育を含めた広義の啓蒙の継承を確認し、それを啓蒙の批判的継承と位置づけた。18世紀の知的運動としての啓蒙が「理性の自己実現」をめざしたのに対して、それが悪しき現状を招いたと批判するアドルノは、理性による支配も不要な「多様なものの共生」を理念としたことを示した。そのうえで、アドルノが啓蒙思想から継承したものとして、①自由や連帯などの肯定、②現状の批判的啓蒙、③現状を脱する契機としての個人とその教育への期待を挙げた。

第二節では、「理性の自己実現」から整合的に導き出される教育観を啓蒙的教育観としたうえで、それが「多様なものの共生」というアドルノの理念に反することをまず確認した。アドルノの自律・経験・**Bildung** への教育は、啓蒙的教育観のように万人への徹底を求められるものではなく、理性と同様に「多様なものの共生」が実現すれば不要となるが、否定的な現状を脱する契機としては限定的に必要とされるものであった。アドルノにとって教育とは、現状の外部を志向するために、現状へ積極的に介入する「抵抗の橋頭堡」と形容できるものだったことを明らかにした。

### （1）アドルノにおける「多様なものの共生」の理念と啓蒙の批判的継承

18世紀ヨーロッパを席卷した啓蒙は、理性が実現しつつある人類史において、その最先端に立つと自負した啓蒙家（Aufklärer）たちが、理性に照らして因習を批判し、理性的な社会を理性的な手段で実現しようとする「理性の自己実現」の知的運動といえるものであった。そこでは神が理性によって読み解かれ（理神論）、公正な理性的社会が求められ（政治理論や富の理論といったいわゆる社会科学）、自然の理性的な理解と利用がめざされた（自然科学と文化）。そして人間もまた、経験によって変わりうる存在で、手つかずの自然を脱し理性に従って（自己）形成（個人の **Bildung**）されることで、自律した存在として理性的な社会を担う（全体の **Bildung**）と理解されていた。

それに対してアドルノは、こうした理性の自己実現をめざした啓蒙が、否定的な現状に帰結したと捉えた。ただしそれは単なる理性による自然支配ではなく、人類史がすでにそのはじめから懐胎していた「理性—自然」の間で織りなされる弁証法的関係から理解される。人間の自己保存のために自然から生まれた理性は、人類史において自然支配を自己実現的に進めた。だが今や社会的現状は人間にとっての新たな脅威である「第二の自然」と化し、さらに理性に抑圧された人間の内的自然は暴力性を露わにし、その極北としてアウシュヴィッツが実現した。ただし、理性の強制の下で生じる身体的苦痛や抑圧・排除されたもの——概念に収まらないものなども含めて——もまた断片的な自然であり、理性の自



己実現が完遂していない証として未だ残されている。アドルノの多くの著作は、学問的な諸概念や社会的現状、そして文化や芸術に至るまでを、「理性—自然」の弁証法的関係という視座から、それが否定的な現状とそれが全てではないことの可能性との双方を孕んだものとして読み解くものであった。

ところで、このアドルノの主題の背後にユートピアの理念が認められることはよく知られている。そしてこの理念の解釈に際しては、人間あるいは理性的なものとして「自然との和解」というホルクハイマーに主導された『啓蒙の弁証法』の主題から理解されることが少なくない。しかし後の『否定弁証法』などの議論に従うと、彼のユートピアの理念は、こうした二項対立を前提とした調和的な「和解」よりも、複数の「多様なものの共生」として理解することが適切であろう。「ユートピアとは、同一性も矛盾をも超えた多様なものの共生であろう」[GS 6: 153 = 182]。同一性と矛盾が支配的な理性によって生まれるものである以上、ユートピアとは、「理性—自然」の弁証法的関係も、その発端となった人間の自己保存さえも、もはや生じる必要のない状態と解される。個人の内面・知・文化・集団・国家・社会・世界のあらゆるレベルでの「多様なものの共生」——このようなユートピアは、概念的な思考という理性の側に立つものによっては十全に描き出すことはできず、また理性的な手段によるその実現も約束できない。たとえユートピアの実現の手段として時に理性的な知や制度が必要であるとしても、それがめざすのは理性の貫徹ではなく理性の支配が不要となる状態である。「人類の至上の原理としての理性の制度化をイメージするなら、[中略]むしろ、こうでなければならぬ、こう整えられ、コントロールされ、組織されなくてはならないというこの原理が、理性の中で止み、溶け去るのをむしろ思い描くべきでしょう」[NS IV 10: 215 f. = 242]。

ただし、ここでアドルノの思想を啓蒙思想から遠く隔たったものとみなすのもまた早計である。啓蒙家たちもやはり人間の自由や人々の連帯への期待を抱いていた。また 18 世紀の知的運動としての啓蒙の定義として、現状を徹底的に批判しそれを広く知らしめること、つまりは批判的啓蒙がしばしば挙げられるが、この批判的啓蒙こそアドルノがその知性を注ぎ続けてきたものだった。そして現状が変わる契機を自律し経験に拓かれた個人に認め、その形成に寄与するのは教育であるという認識もまたアドルノが啓蒙から継承したものだ。むしろ政治や経済などの社会的なものが 18 世紀啓蒙期よりも強制の度合いを強め、個人の側への期待がより切実なものとなったというアドルノにとって、個人に直接働きかける教育は啓蒙家たち以上に重要であった。

アドルノは啓蒙がかつてめざしたものを批判しながら「多様なものの共生」の理念を掲げ、「理性の自己実現」よりも理性の意義を限定的に理解した。そして否定的な現状における「多様なものの共生」の理念に適う営為を、アドルノは批判的啓蒙の実践と教育との双方に見出したのだといえる。このような啓蒙の批判的継承に、アドルノの思想全体と教育への期待との一貫性が認められる。

## (2) アドルノの教育思想

それでは、こうしたアドルノの思想と教育への期待から、どのような教育思想が導き出されるだろうか。「理性の自己実現」から導き出される啓蒙的な教育観と対比させながら明らかにした。

第五章までの考察をふまえると、アドルノの教育への期待は、「アウシュヴィッツ再来」を避けるべく、他律の回避としての自律を促し、現状の外部を志向できる経験の機会を提供し、静的な現状の只中で動態的な *Bildung* を喚起することにあつたといえる。ただし、アドルノが「理性の自己実現」としての啓蒙から距離をとり、「多様なものの共生」を理念としたことをふまえれば、彼の教育思想の核心を啓蒙的な教育観によって理解することは避けられねばならない。ここで啓蒙的教育観というのは、理性によって理

想的な状態や人間像を描き、それをめざした理性的な教育を万人に徹底することで、理性的な世界が実現できるとする教育観であり、概念的に理想化された教育目的と教育目標から教育手段・教育方法を演繹的に導き出す教育観のように、今の私たちにも身近なものである。しかし、これは「理性の自己実現」としての啓蒙とその手段としての教育という図式に従っており<sup>3</sup>、アドルノにとっては「多様なものの共生」の理念に反する。なぜなら「多様なものの共生」は理性によっては十全に描きえないうえに、理想化された目的や目標から演繹的に教育を語りそれをシステムティックに徹底しようとするなら、それはかつての啓蒙と同様に「多様なものの共生」とは逆のものに弁証法的に転化し、支配的な強制への加担となるからである。そのためアドルノの教育思想には、啓蒙的教育観とは根本的に異なる立論が求められる。

そこで改めて注目されるのが、「アウシュヴィッツ再来の回避」というアドルノの教育目的である。アドルノは理想的な状態を直接実現するための教育ではなく、現状を出発点としながら、それが懐胎する危険を回避するための教育を求めた。そのため、アドルノは「強靱な自我」への教育を体系的・制度的に求めるよりも、現状における危険な権威の除去を第一に訴えたのだった。

また彼の教育実践的な提言に関しても、現状の外部への志向を拓く教育不可能な「質的な跳躍」に注目するなど<sup>4</sup>、教育の限界を自覚しながら、否定的な現状への局所的な介入を期待するものであった。この介入は、現状の学校教育にとっての介入であると同時に、否定的な社会的現状にとっての教育（とそれによって育った個人と）の介入の双方を意味する。この介入が双方の現状にとって「抵抗」であることをふまえ、このアドルノの教育実践への期待を、否定的な現状に対する「抵抗の橋頭堡」と形容したい。

このようなアドルノの教育思想において、教育は啓蒙的教育観のように自己の貫徹を最終的な目標とすることはない。「多様なものの共生」の理念を掲げながら、この理念に適う教育を求めた結果、その教育は現状に対する回避と抵抗としての性格を帯びることになった。ここにアドルノの思想全体と彼の教育思想との一貫性、そして啓蒙的教育観とアドルノの教育思想との大きな差異が認められる。

アドルノの教育思想は、何らかの理想ではなく「アウシュヴィッツ再来」という回避されるべきものを出発点とし、否定的な現状へ限定的に介入する「抵抗の橋頭堡」として教育を構想するものであった。それは現状の学校教育から危険を除去することであり、社会的現状の批判と自己反省を促すことで他律の回避を個人に求める教育であり、そして現状の外部への志向を個人に拓く経験への教育であった。こうした教育には、硬直した個人と社会が動的に関係を結ぶ *Bildung* の現代的な可能性があるとアドルノは

<sup>3</sup> ここで啓蒙的教育観と呼ぶものと啓蒙との関係を詳しく述べるなら、次のようになる。知的運動としての啓蒙には、理性の実現された状態を目標とし、その状態は理性によって十全に描くことができ、かつ理性に従うことでそれが実現できるという世界観が基本的に認められる。またここでは、理性的な世界を実現するために、同一の理性的な人間になることが全ての個人に求められる。すなわち、全ての人間が等しく理性的に生きることを目標とし、その人間は理性によって十全に描くことができ、理性に従うことで実現できるという人間観である。そしてここから、理性的な人間を形成する手段は理性に従った教育であり、全ての人に確実にそれを行うために教育の制度化が必要であるという教育観が導き出される。すなわち、単一の理性的な人間を理性的に描き、それを目標として掲げ、理性的に制度化された教育をその手段として全ての人に実現することで、理性的な世界を実現するという教育観である。

<sup>4</sup> 他にもこれまで本論では次の点に言及してきた。まず、アドルノは無意識レベルに沈殿した諸々の経験に人間形成の培地を認めていた。また彼は個人の集合という次元を超えた独自の物質性を社会に認めていたため、仮に万人が理想的人間となったとしても、理想的な世界の実現にそのまま直結するわけではないと理解していた。さらにアドルノの教育実践への積極的な提言は主に（成人教育を含む）学校教育における政治教育や芸術教育に関わるものであり、生徒指導などに関しては現状を厳しく批判しながらも穏当な実践の提言にとどまっていた。こうしたアドルノの教育論に認められる抑制的な側面は、啓蒙的教育観と大きく隔たるものである。

とらえていた。ただしアドルノはこうした教育の徹底による「理性の自己実現」を求めたわけではない。彼の教育思想を導くのは「多様なものの共生」の理念である。この理念に照らせば、人間の内面、個人、その人間形成と教育、そして集団・社会・世界といった様々な次元において「多様なものの共生」の可能性は遍在し、それはより豊かなものでありえる。この可能性を教育の周りに見出しながら、教育によって拓くことをアドルノは求めたのだった。

最後に、本論文の残された課題を二つ挙げる。ひとつはアドルノの「多様なものの共生」の理念を充実させる課題である。異様な世界観と人間像、醜の美学、毀損したもの、笑いなどに着目した彼の芸術論や文学論をふまえると、「多様なものの共生」は、調停が行き届いたかのように穏やかに調和した状態というよりも、混沌とした豊穡であるように思われる。これは理性と自然の調和を謳ったロマン主義をアドルノがいかに批判的に継承し、現代の芸術と文学を論じたかを明らかにすることから始められようが、その内実とその教育学的射程を明らかにする作業は今後の課題としたい。

もうひとつの課題は、アドルノの教育思想と他の（教育）思想とが連携する可能性を明らかにすることである。教育への期待を抑制的にとどめ、「多様なものの共生」を理念とした彼の教育思想は、否定的な現状への加担ではない限り、多様な教育実践との「共生」を否定しない。たとえばハーバーマスやアーペルの討議的な思想に基づく教育実践とアドルノの教育思想に基づく教育実践は、現状への批判と民主主義への志向において連携できるところもあるのではないか。今後の研究ではこうした連携の可能性を探りたい。

## 主要参考文献

### <一次文献>

- ABB: Theodor Wiesengrund Adorno und Walter Benjamin Briefwechsel. Loniz, H. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1994.
- Adorno, Th. W.(1956): Aufklärung ohne Phrasen. Zum Deutschen Volkshochschultag 1956 – Ersatz für das „Studium Generale?“. In: Die Zeit, Nr. 41. 11. Oktober 1956, S. 4. (「常套句のない啓蒙」)
- Adorno, Th. W.(2003): Kultur und Culture. Wiederabdruck in: Bahamas Nr. 43 (04. 2003), S. 63 ff. (「文化とカルチャー」)
- Adorno, Th. W.(2013): Studien zum autoritären Charakter. Mit Vorrede von Friedeburg, L.v., Übersetzt von Weinbrenner, M. 8. Aufl., Frankfurt am Main.
- Adorno, Th. W. und Eisler, H.(2006): Komposition für den Film. Mit einem Nachwort und einer DVD, Frankfurt am Main.
- Adorno, Th. W. und Gehlen, A.(1975): Ist die Soziologie eine Wissenschaft vom Menschen? In: Grenz, Fr.: Adornos Philosophie in Grundbegriffen. Auflösung einiger Deutungsprobleme, Frankfurt am Main, S. 244 ff.
- Adorno, Th. W. und Kerényi, K.(1998): Mythologie und Aufklärung. Ein Rundfunkgespräche. In: Theodor W. Adorno Archi(Hrsg.): Frankfurter Adorno Blätter V, München, S. 89-102. (「神話学と啓蒙」)
- AHB: Theodor Wiesengrund Adorno und Max Horkheimer Briefwechsel. 4 Bde. Gödde, Ch., u. Loniz, H. (Hrsg.), Frankfurt am Main 2003-2006.
- Adorno, Th. W.: Ad Antisemitismus. In Bd. II, S. 441 ff. (「反ユダヤ主義について」)
- Adorno, Th. W.: Nationalsozialismus und Antisemitismus. In Bd. II, S. 539 ff. (「国民社会主義と反ユダヤ主義」)
- Adorno, T. W.: Research Project on Social Discrimination. In Bd. II, S. 623 ff.
- Adorno, Th. W.: Ad Child Study. In Bd. II, S. 630 ff. (「子ども研究について」)
- Horkheimer, M.: American Jewish Committee Progress Report of the Scientific Department. In Bd. III, S. 495 ff.
- Adorno, Th. W.: Über die psychoanalytische Praxis. In Bd. IV, S. 876 ff. (「心理学の実践について」)
- AP: Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., Sanford, R. N.: The Authoritarian Personality, New York 1969. (アドルノ他 (1980) 『権威主義的パーソナリティ』 田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳、青木書店。)
- Benjamin, W.(1955): Walter Benjamin Schriften. Adorno, Th. W./ Adorno,G.(Hrsg.), unter Mitwirkung von Friedrich Podszus. 2 Bände, Frankfurt am Main.
- Benjamin, W. (1966): Walter Benjamin Briefe. Scholem, G./ Adorno, Th. W. (Hrsg.), Frankfurt am Main.
- EzM: Adorno, Th. W.: Erziehung zur Mündigkeit. Vorträge und Gespräche mit Hellmut Becker 1959-1969. Kadelbach, G. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1971. (アドルノ (2011) 『自律への教育』 原千史・小田智敏・柿木伸之訳、中央公論新社。)
- Was bedeutet: Aufarbeitung der Vergangenheit. In EzM, S. 10 ff. (アドルノ (2011) 「過去の総括とは何を意味するのか」 前掲『自律への教育』 所収、9-36 頁。) (「過去の克服とは何か」)
- Philosophie und Lehrer. In EzM, S. 29 ff. (アドルノ (2011) 「哲学と教師」 前掲『自律への教育』 所収、37-69 頁。)
- Adorno, Th. W., Becker, H. und Kadelbach, G.: Fernsehen und Bildung. In EzM, S. 50 ff. (アドルノ (2011) 「テレビと教育」 前掲『自律への教育』 所収、71-95 頁。) (「テレビと教養」)
- Tabus über dem Lehrberuf. In EzM, S. 70 ff. (アドルノ (2011) 「教職を支配するタブー」 前掲『自律への教育』 所収、97-121 頁。)
- Erziehung nach Auschwitz. In EzM, S. 88 ff. (アドルノ (2011) 「アウシュヴィッツ以後の教育」 前掲『自律への教育』 所収、124-146 頁。)
- Adorno, Th. W. und Becker, H.: Erziehung – wozu? In EzM, S. 105 ff. (アドルノ (2011) 「教育は何を目指して」 前掲『自律への教育』 所収、147-166 頁。) (「教育——何のために」)

- Adorno, Th. W. und Becker, H.: Erziehung zur Entbarbarisierung. In EzM, S. 120 ff. (アドルノ (2011) 「野蛮から脱するための教育」前掲『自律への教育』所収、167-185 頁。) (「野蛮を脱するための教育」)
- Adorno, Th. W. und Becker, H.: Erziehung zur Mündigkeit. In EzM, S. 133 ff. (アドルノ (2011) 「自律への教育」前掲『自律への教育』所収、187-208 頁。) (「成人性への教育」)
- GS: Theodor Wiesengrund Adorno Gesammelte Schriften. 20 Bde. Tiedemann, R., Adorno, G., Buck-Morss, S., Schultz, K. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1971 - 86.
- Die Transzendenz des Dinglichen und Noematischen in Husserls Phänomenologie. In Bd. 1, S. 7 ff. (「フッサールの現象学における物的なものとのエマ的なものの超越」)
- Der Begriff des Unbewusstseins in der transzendentalen Seelenlehre. In Bd. 1, S. 79 ff. (「超越論的靈魂論における無意識の概念」)
- Die Aktualität der Philosophie. In Bd. 1, S. 325 ff. (アドルノ (2011) 「哲学のアクチュアリティ」アドルノ『哲学のアクチュアリティ』細見和之訳、みすず書房、1-38 頁。)
- Die Idee der Naturgeschichte. In Bd. 1, S. 345 ff. (アドルノ (2011) 「自然史の理念」前掲『哲学のアクチュアリティ』所収、39-84 頁。)
- Thesen über die Sprache des Philosophen. In Bd. 1, S. 366 ff. (アドルノ (2011) 「哲学者の言語についてのテーゼ」前掲『哲学のアクチュアリティ』所収、85-97 頁。)
- Kierkegaard. Konstruktion des Ästhetischen. In: Bd. 2, S. 7 ff. (アドルノ (1998) 『キルケゴール——美的なもの構築』山本泰生訳、みすず書房。)
- Horkheimer, M. und Adorno, Th. W.: Dialektik der Aufklärung. Philosophische Fragmente. In Bd. 3, S. 7 ff. (ホルクハイマー／アドルノ (1990) 『啓蒙の弁証法——哲学的断想』徳永恂訳、岩波書店。)
- Minima Moralia. Reflexionen aus dem beschädigten Leben. In Bd. 4, S. 11 ff. (アドルノ (1979) 『ミニマ・モラリア——傷ついた生活裡の省察』三光長治訳、法政大学出版局。)
- Drei Studien zu Hegel. In Bd. 5, S. 247 ff. (アドルノ (2006) 『三つのヘーゲル研究』渡辺祐邦訳、筑摩書房。)
- Negative Dialektik. In Bd. 6, S. 7 ff. (アドルノ (1996) 『否定弁証法』木田元・徳永恂・渡辺祐邦・三島憲一・須田朗・宮武昭訳、作品社。)
- Jargon der Eigentlichkeit. Zur deutschen Ideologie. In Bd. 6, S. 413 ff. (アドルノ (1992) 『本来性という隠語——ドイツ的なイデオロギーについて』笠原賢介訳、未来社。)
- Ästhetische Theorie. In Bd. 7, S. 6 ff. (アドルノ (1985) 『美の理論』大久保健治訳、河出書房新社。)
- Ästhetische Theorie. Paralipomena. In Bd. 7, S. 389 ff. (アドルノ (1988) 『美の理論・補遺』大久保健治訳、河出書房新社。)
- Gesellschaft. In Bd. 8, S. 9 ff. (「社会」)
- Die revidierte Psychoanalyse. In Bd. 8, S. 20 ff. (アドルノ (2012) 「修正された精神分析」アドルノ『ゾチオロギカ——フランクフルト学派の社会学論集』三光長治・市村仁・藤野寛訳、平凡社、92-118 頁。)
- Zum Verhältnis von Soziologie und Psychologie. In Bd. 8, S. 42 ff. (「社会学と心理学の関係」)
- Theorie der Halbbildung. In Bd. 8, S. 93 ff. (アドルノ (2012) 「半教養の理論」前掲『ゾチオロギカ——フランクフルト学派の社会学論集』所収、210-249 頁。)
- Über Statik und Dynamik als soziologische Kategorien. In Bd. 8, S. 217 ff. (アドルノ (2012) 「社会学のカテゴリーとしての静学と動学」前掲『ゾチオロギカ——フランクフルト学派の社会学論集』所収、300-326 頁。)
- Einleitung zu Emile Durkheim, » Soziologie und Philosophie «. In Bd. 8, S. 245 ff. (「エミール・デュルケム『社会学と哲学』序論」)
- Einleitung zum Positivismusstreit in der deutschen Soziologie. In Bd. 8, S. 280 ff. (アドルノ (1992) 「序論」アドルノ／ポパー他 (1979) 『社会科学の論理——ドイツ社会学における実証主義論争』城塚登・浜井修・遠藤克彦訳、河出書房新社、7-84 頁。)
- Adorno, T. W., Lowenthal, L., Massing, P. W.: Anti-Semitism and Fascist Propaganda. In Bd. 8, S. 397 ff. (「反ユダヤ主義とファシスト・プロパガンダ」)
- Freudian Theory and the Pattern of Fascist Propaganda. In Bd. 8, S. 406 ff. (「フロイト理論とファ

シスト・プロパガンダの類型」)

- Bemerkungen über Politik und Neurose. In Bd. 8, S. 434 ff. (「政治と神経症に関する注釈」)
- Individuum und Organisation. Einleitungsvortrag zum Darmstädter Gespräch 1953. In Bd. 8, S. 440 ff. (「個人と組織」)
- The Psychological Technique of Martin Luther Thomas' Radio Addresses. In Bd. 9-1, S. 9 ff. (「マーティン・ルーサー・トーマスのラジオ演説の心理学的テクニック」)
- Studies in the Authoritarian Personality. In Bd. 9-1, S. 144 ff. (アドルノ (1980) 『権威主義的パーソナリティ』)
- Schuld und Abwehr. Eine qualitative Analyse zum Gruppenexperiment. In Bd. 9-2, S. 121 ff. (「罪責と防衛」)
- Horkheimer, M. und Adorno, Th. W.: Vorurteil und Charakter. In Bd. 9-2, S. 360 ff. (「偏見と性格」)
- Starrheit und Integration. In Bd. 9-2, S. 374 ff. (「強情さと人格の統合」)
- Replik zu Peter R. Hofstätters Kritik des Gruppenexperiments. In Bd. 9-2, S. 378 ff. (「グループ実験へのペーター・R・ホフシュテッターの批判に対する再抗弁」)
- Kulturkritik und Gesellschaft. In Bd. 10-1, S. 11 ff. (アドルノ (1996) 「文化批判と社会」、アドルノ『プリズメン』 渡辺祐邦・三原弟平訳、筑摩書房、9-36 頁。)
- Bach gegen seine Liebhaber verteidigt. In Bd. 10-1, S. 138 ff. (アドルノ (1996) 「バッハをその愛好者たちから守る」前掲『プリズメン』所収、197-218 頁。)
- Arnold Schönberg 1874-1951. In Bd. 10-1, S. 152 ff. (アドルノ (1996) 「アルノルト・シェーンベルク 1874-1951 年」前掲『プリズメン』所収、219-264 頁。)
- Amorbach. In Bd. 10-1, S. 302 ff. (アドルノ (2017) 「アモールバッハ」アドルノ『模範像なしに——美学小論集』竹峰義和訳、みすず書房、22-32 頁。)
- Philosophie und Lehrer. In Bd. 10-2, S. 474 ff. (アドルノ (1971) 「哲学と教師」、アドルノ『批判的モデル集 I——介入』大久保健治訳、法政大学出版社、33-64 頁。)
- Prolog zum Fernsehen. In Bd. 10-2, S. 507 ff. (アドルノ (1971) 「テレビジョン序説」前掲『批判的モデル集 I——介入』所収、85-100 頁。)
- Fernsehen als Ideologie. In Bd. 10-2, S. 518 ff. (アドルノ (1971) 「イデオロギーとしてのテレビジョン」前掲『批判的モデル集 I——介入』所収、101-122 頁。)
- Was bedeutet: Aufarbeitung der Vergangenheit. In Bd. 10-2, S. 555 ff. (アドルノ (1971) 「過去の清算が意味するところ」前掲『批判的モデル集 I——介入』所収、157-184 頁。)
- (Vorrede): In Bd. 10-2, S. 597 ff. (アドルノ (1971) (序文) 『批判的モデル集 II——見出し語』大久保健治訳、法政大学出版社、3-5 頁。)
- Tabus über Lehrberuf. In Bd. 10-2, S. 656 ff. (アドルノ (1971) 「教職にかんするタブー」前掲『批判的モデル集 II——見出し語』所収、85-109 頁。)(「教職を支配するアブー」)
- Erziehung nach Auschwitz. In Bd. 10-2, S. 674 ff. (アドルノ (1971) 「アウシュヴィッツ以後の教育」前掲『批判的モデル集 II——見出し語』所収、110-133 頁。)
- Auf die Frage: Was ist deutsch. In Bd. 10-2, S. 691 ff. (アドルノ (1971) 「ドイツ的とは何かという問いに答えて」前掲『批判的モデル集 II——見出し語』所収、134-148 頁。)
- Wissenschaftliche Erfahrungen in Amerika. In Bd. 10-2, S. 702 ff. (アドルノ (1971) 「アメリカにおける学問上の諸経験」前掲『批判的モデル集 II——見出し語』所収、149-198 頁。)
- Zu Subjekt und Objekt. In Bd. 10-2, S. 741 ff. (アドルノ (1971) 「主観と客観について」前掲『批判的モデル集 II——見出し語』所収、201-225 頁。)
- Marginalien zu Theorie und Praxis. In Bd. 10-2, S. S. 759 ff. (アドルノ (1971) 「理論と実践にかんする傍注」前掲『批判的モデル集 II——見出し語』所収、226-258 頁。)(「理論と実践に関するコメント」)
- Der Essay als Form. In: GS Bd. 11, S. 9 ff. (アドルノ (2009) 「形式としてのエッセイ」、アドルノ『文学ノート 1』三光長治・恒川隆男・前田良三・池田信雄・杉橋陽一訳、みすず書房、3-33 頁。)
- Über epische Naivität. In: GS Bd. 11, S. 34 ff. (アドルノ (2009) 「叙事文学の素朴さ」前掲『文学ノート 1』所収、34-41 頁。)

- Standort des Erzählers im zeitgenössischen Roman. In: GS Bd. 11, S. 41 ff. (アドルノ (2009) 「現代小説における語り手の位置」前掲『文学ノート1』所収、42-51頁。)
- Zum Gedächtnis Eichendorffs. In: GS Bd. 11, S. 69 ff. (アドルノ (2009) 「アイヒェンドルフの思い出のために」前掲『文学ノート1』所収、75-109頁。)
- Zur Schlußzene des Faust. (アドルノ (2009) 「『ファウスト』の最終場面によせて」前掲『文学ノート1』所収、155-168頁。)
- Erpreßte Versöhnung. Zu Georg Lukács: >Wider den Missverstandenen Realismus<. In: GS Bd. 11, S. 251 ff. (アドルノ (2009) 「無理強いされた和解——ジェルジ・ルカーチ『誤解されたリアリズムに抗して』」前掲『文学ノート1』所収、312-352頁。)
- Voraussetzungen. Aus Anlass einer Lesung von Hans G. Helms. In Bd. 11, S. 431 ff. (アドルノ (2009) 「諸前提——ハンス・G・ヘルムスの朗読会に際して」、アドルノ『文学ノート2』三光長治・高木昌史・圓子修平・恒川隆男・竹峰義和・前田良三・杉橋陽一訳、みすず書房、142-161頁。)
- Parataxis. Zur späten Lyrik Hölderlins. In Bd. 11, S. 447 ff. (アドルノ (2007) 「パラタクシス——ヘルダーリン後期の抒情詩に寄せて」前掲『文学ノート2』所収、162-218頁。)
- Offener Brief an Rolf Hochhuth. In Bd. 11, S. 591 ff. (アドルノ (2007) 「ロルフ・ホッフフートへの公開書簡」前掲『文学ノート2』所収、349-359頁。)
- Zur Dialektik von Heiterkeit. In Bd. 11, S. 599 ff. (アドルノ (2007) 「芸術は明朗か」前掲『文学ノート2』所収、360-369頁。)
- Philosophie der neuen Musik. In Bd. 12, S. 7 ff. (アドルノ (2007) 『新音楽の哲学』龍村あや子訳、平凡社。)
- Mahler. Eine musikalische Physiognomik. In Bd. 13, S. 149 ff. (アドルノ (1999) 『マーラー——音楽観相学』龍村あや子訳、法政大学出版局。)
- Berg. Der Meister des kleinsten Übergangs. In Bd. 13, S. 321 ff. (アドルノ (1983) 『アルバン・ベルク——極微なる移行の巨匠』平野嘉彦訳、法政大学出版局。)
- Vorrede zur dritten Ausgabe. In Bd. 14, S. 9 ff. (アドルノ (1998) 「第三版への序」、アドルノ『不協和音』三光長治・高辻知義訳、平凡社、193-223頁7-14頁。)
- Zur Musikpädagogik. In Bd. 14, S. 108 ff. (アドルノ (1998) 「音楽教育によせて」前掲『不協和音』所収、193-223頁。)
- Tradition. In Bd. 14, S. 127 ff. (アドルノ (1998) 「伝統」前掲『不協和音』所収、225-254頁。)
- Thesen gegen die musikpädagogische Musik. In Bd. 14, S. 437 ff. (アドルノ (1998) 「音楽教育的音楽に対する九つのテーゼ」前掲『不協和音』所収、300-306頁。)
- Einleitung in die Musiksoziologie. Zwölf theoretische Vorlesungen. In Bd. 14, S. 169 ff. (アドルノ (1999) 『音楽社会学序説』高辻知義・渡辺健訳、平凡社。)
- Der getreue Korrepetitor. Lehrschriften zur musikalischen Praxis. In Bd. 15, S. 157 ff. (『忠実なコレペティートル——音楽実践の教材集』)
- Über einige Relationen zwischen Musik und Malerei. In Bd. 16, S. 628 ff. (「音楽と絵画の関係について」)
- Musik, Sprache und ihr Verhältnis im gegenwärtigen Komponieren. In Bd. 16, S. 649 ff. (「音楽、言語、そして現在の作曲におけるその関係」)
- Spätstil Beethovens. In: Bd. 17, S. 13 ff. (アドルノ (1994) 「ベートーヴェンの晩年様式」、アドルノ『楽興の時』三光長治・川村二郎訳、白水社、15-21頁。)
- Über Jazz. In Bd. 17, S. 74 ff. (アドルノ (1994) 「ジャズについて」前掲『楽興の時』所収、108-160頁。)
- Über das gegenwärtige Verhältnis von Philosophie und Musik. In Bd. 18, S. 149 ff. (「現代における哲学と音楽の関係について」)
- Schöne Stellen. In: Bd. 18, S. 695 ff.
- Zur gesellschaftlichen Lage der Musik. In Bd. 18, S. 729 ff. (アドルノ (2002) 「音楽の社会的状況によせて」、アドルノ『アドルノ 音楽・メディア論集』渡辺裕編、村田公一・船木篤也・吉田寛訳、平凡社、8-107頁。)
- Musikpädagogische Musik. Brief an Ernst Krenek. In Bs. 18, S. 805 ff. (「音楽教育的音楽——エルンスト・クシェネクへの書簡」)

- »Musik im Fernsehen ist Brimborium«. Ein »Spiegel« Gespräche. In Bd. 19, 559 ff. (アドルノ (2002) 「テレビジョンの音楽は鳴り物入りの空騒ぎ——『シュピーゲル』誌対談」前掲『アドルノ 音楽・メディア論集』所収、307-327 頁。)
  - Democratic Leadership and Mass Manipulation. In Bd. 20-1, S. 267 ff. (「民主的リーダーシップと大衆操作」)
  - Zum Problem der Familie. In Bd. 20-1, S. 302 ff. (「家族の問題について」)
  - Aktualität der Erwachsenenbildung. Zum Deutschen Volkshochschultag Frankfurt am Main, 1956. In Bd. 20-1, S. 327 ff. (「成人教育のアクチュアリティ」)
  - Zur Demokratisierung der deutschen Universitäten. In: Bd 20-1, S. 332 ff. (「ドイツの大学の民主化」)
  - Kann das Publikum wollen? In Bd. 20-1, S. 342 ff. (「視聴者の要求は可能なのか」)
  - Zur Bekämpfung des Antisemitismus heute. In Bd. 20-1, S. 360 ff. (「今日における反ユダヤ主義との闘いによせて」)
  - Einführungen in die Darmstädter Gemeindestudie. In: Bd. 20-2, S. 605 ff. (「ダルムシュタット地域研究」)
  - Horkheimer, M. und Adorno, Th. W.: Freud in der Gegenwart. Ein Vortragszyklus der Universitäten Frankfurt und Heidelberg zum hundertsten Geburtstag. Mit Beiträgen von Franz Alexander u. a. Frankfurt am Main. 1957. In Bd. 20-2, S. 646 ff. (「現在のフロイト」)
  - (Vorrede) Heribert Adam, Studentenschaft und Hochschule. Möglichkeiten und Grenzen studentischer Politik. Frankfurt a.M. 1965. (Frankfurter Beiträge zur Soziologie. 17.) In: Bd. 20-2, S. 661 ff.
  - (Vorrede) Adorno, Th. W. und Friedeburg, L.v. : Manfred Teschner, Politik und Gesellschaft im Unterricht. Eine soziologische Analyse der politischen Bildung an hessischen Gymnasien. Frankfurt a.M. 1968. (Frankfurter Beiträge zur Soziologie. 21.) In: Bd. 20-2, S. 671 ff.
  - Horkheimer, M. und Adorno, Th. W.: Vorwort zum Forschungsbericht über »Universität und Gesellschaft«. In: Bd. 20-2, S. 685 ff.
  - Adorno, Th. W. und Oehler, Ch.: Die Abhängigkeit des Ausbildungszieles von den Studierenerwartungen der Studenten. In: Bd. 20-2, S. 689 ff. (「大学教育に対する学生の期待に左右される職業的教育目標」)
  - Zur Psychologie des Verhältnisses von Lehrer und Schuler. In: Bd. 20-2, S. 715 ff. (「教師と生徒の関係の心理学」)
- HGS: Max Horkheimer Gesammelte Schriften. 19 Bde, Schmidt, A. u. Schmid Noerr, G.(Hrsg.), Frankfurt am Main 1985-1996.
- Schmid Noerr, G.: Nachwort. Die Stellung der >Dialektik der Aufklärung< in der Entwicklung der Kritischen Theorie. Bemerkungen zu Autorschaft, Entstehung, einigen theoretischen Implikationen und später Einschätzung durch die Autoren. In Bd. 5, S. 423 ff.
  - Kants Philosophie und Aufklärung. In Bd. 7, S. 160 ff.
  - Himmel, Ewigkeit und Schönheit. Interview zum Tode Theodor W. Adornos. In Bd. 7, S. 291 ff.
  - Plan des Forschungsprojekts über Antisemitismus. In Bd. 12, S. 165 ff.
  - Deutschlands Erneuerung nach dem Krieg und die Funktion der Kultur. In Bd. 12, S. 184 ff.
  - Programm einer intereuropäischen Akademie. In Bd. 12, S. 195 ff.
  - Diskussionen über die Differenz zwischen Positivismus und materialistischer Dialektik. In Bd. 12, S. 436 ff.
  - Horkheimer, M. und Adorno, Th. W.: Diskussionen über Sprache und Erkenntnis, Naturbeherrschung am Menschen, politische Aspekte des Marxismus(1939). In Bd. 12, S. 494 ff.
  - Horkheimer, M. und Adorno, Th. W.: Rettung der Aufklärung. Diskussionen über eine geplante Schrift zur Dialektik. In Bd. 12, S. 593 ff.
  - Die Aufklärung. Vorlesungsnachschrift von Tillack, H. In Bd. 13, S. 570 ff.
  - Briefwechsel 1913 – 1936. In Bd. 15, S. 9 ff.
- MHA: Max Horkheimer Archiv.
- Horkheimer, M. und Adorno, Th. W.: Professor Dr. Max Horkheimer und Professor Dr. Theodor Adorno nehmen Stellung zu aktuellen Fragen. In: Schülerspiegel (2). MHA V 44 a.



- Horkheimer, M. und Adorno, Th. W.: “Sociologie Contemporaine” MHA IX 28.
- Institut für Sozialforschung: “Soziologische Exkurse“. MHA IX 29.
- Institut für Sozialforschung: Konferenzen zur Vorbereitung und Auswertung von Studienreisen deutscher Erzieher und Wissenschaftler in die USA. MHA IX 235.
- Adorno, Th. W.: Plans of new Research Projects of the “Institut für Sozialforschung”. MHA IX 69.
- Forschungsprojekte und Memoranden zur Umgestaltung Nachkriegsdeutschlands, besonders zur Umerziehung. MHA IX 172.
- Memorandum on the Elimination of German Chauvinism. MHA IX 172. 27.
- Adorno, Th. W.: Über den Begriff der Bildung. Entwurf für die Rektoratsrede “Begriff der Bildung” Max Horkheimers zur Immatrikulationsfeier im Wintersemester 1952/53. MHA X 24.1 d.
- Adorno, Th. W. und Becker, H.: Kann Aufklärung helfen? Erwachsenenbildung und Gesellschaft. Gespräch zwischen Theodor W. Adorno und Hellmut Becker im Abendstudio des Hessischen Rundfunks am 13. Dezember. MHA XIII 8.
- Horkheimer, M., Fromm, E., Marcuse, H. u. a.(1987): Studien über Autorität und Familie. Forschungsberichte aus dem Institut für Sozialforschung. 2. Aufl., Lüneburg. (『権威と家族に関する研究』)
- NS: Adorno Nachgelassene Schriften, Schröder, Th. u. a. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1993 ff. (erscheint noch).
- Beethoven. Philosophie der Musik. Fragmente und Texte. 3. Aufl., Frankfurt am Main 1999. In: NS I 1. (アドルノ (1997) 『ベートーヴェン——音楽の哲学』 大久保健治訳、作品社。)
- Probleme der Moralphilosophie. 2. Aufl., Frankfurt am Main 1997. In: NS IV 10. (アドルノ (2006) 『道徳哲学講義』 船戸満之訳、作品社。)
- Einleitung in die Soziologie. Frankfurt am Main 1993. In: NS IV 15. (アドルノ (2001) 『社会学講義』 河原理・太寿堂真・高安啓介・細見和之訳、作品社。)
- PdS: Adorno, Th. W., Albert, H., Dahrendorf, R., Habermas, J., Pilot, H., Popper, K.: Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie. 5. Aufl., Darmstadt und Neuwied 1976. (アドルノ /ポパー他 (1979) 『社会科学の論理——ドイツ社会学における実証主義論争』 城塚登・浜井修訳、河出書房新社。)
- PM1: Adorno, Th. W.: Probleme der Moralphilosophie. Vorlesung, gehalten im Wintersemester 1956/57 an der Universität Frankfurt, Tzposkript im Theodor Wiesengrund Adorno Archv, Frankfurt am Main. (Schweppenhäuser 1993 からの再引用。引用箇所には講義の日、月、年を付したうえて、再引用したページ数を示す。)
- Pollock, F.(Bearbeiter)(1955): Gruppenexperiment. Ein Studienbericht, Frankfurt am Main. (『グループ実験』)
- PT1: Adorno, Th. W.: Philosophische Terminologie I. Frankfurt am Main 1973.
- SE: Institut für Sozialforschung: Soziologische Exkurse. Nach Vorträgen und Diskussionen, Hamburg 2013. (フランクフルト社会研究所 (1983) 『現代社会学の諸相——社会学理論への補遺』 山本鎮雄訳、恒星社厚生閣。)(「社会学の諸相——講義と議論」)
- ZfS: Zeitschrift für Sozialforschung 1932-1941, 9 Jgg., München 1980. (『社会研究誌』)
- Institute of Social Research: Research Project on Antisemitism. In IX Jg. (“Studies in Philosophy and Social Science”) Heft 1, S. 124 ff.

< 二次文献 (外国語: 主に本要約で言及したもの) >

- Ahlheim, K.(2010): Theodor W. Adornos „Erziehung nach Auschwitz“ – Rezeption und Aktualität. In: Ahlheim, K./ Heyl, M.(Hrsg.)(2010): Adorno revisited. Erziehung nach Auschwitz und Erziehung zur Mündigkeit heute. Hannover, S. 38 ff.
- Ahlheim, K./ Heyl, M.(Hrsg.)(2010): Adorno revisited. Erziehung nach Auschwitz und Erziehung zur Mündigkeit heute. Hannover.
- Albrecht, Cl.(1999a): Die Massenmedien und die Frankfurter Schule. In Ders. u. a.: Die intellektuelle Grundung der Bundesrepublik. Eine Wirkungsgeschichte der Frankfurter Schule, Frankfurt am Main/ New York, S. 203-246.
- Albrecht, Cl.(1999b): Im Schatten des Nationalsozialismus: Die politischce Pädagogik der

- Frankfurter Schule. In Ders. u. a.: Die intellektuelle Grundung der Bundesrepublik. Eine Wirkungsgeschichte der Frankfurter Schule, Frankfurt am Main/ New York, S. 387-447.
- Althaus, G.(1976): Die negative Pädagogik in Adornos Kritischer Theorie, Berlin.
- Benjamin, J.(1994): The End of Internalization. Adorno's Social Psychology. In: Bernstein, J. Ed. The Frankfurt School: Critical Assessments. vol. 3, Section 4: Theodor Adorno. New York, pp. 132-153.
- Benner, D./ Göstemeyer, K. -F.(1987): Postmoderne Pädagogik. Analyse oder Affirmation eines gesellschaftlichen Wandels? In: Zeitschrift für Pädagogik, 33. Jg. 1987, Nr. 1, S. 61-82.
- Bollnow, O. F.(1983): Anthropologische Pädagogik, Berlin.
- Brose, K.(1976): Philosophie und Erziehung. Pädagogische Implikate in der Philosophie Kants, Diltheys und in der kritischen Theorie der Gesellschaft mit Anmerkungen zu einer künftigen Pädagogik, Frankfurt am Main.
- Demirović, A.(1999): Der nonkonformistische Intellektuelle. Die Entwicklung der Kritischen Theorie zur Frankfurter Schule, Frankfurt am Main. (デミロヴィッチ (2009-2011) 『非体制順応的知識人——批判理論のフランクフルト学派への発展』 仲正昌樹監訳、全四分冊、御茶ノ水書房。)
- Fechler, B./ Kößler, G./ Lieberz-Groß, T.(Hrsg.)(2001): »Erziehung nach Auschwitz« in der multikulturellen Gesellschaft. Pädagogische und soziologische Annäherungen [2000], 2. Aufl., Weinheim/ München.
- Freud, G.(1991): Das Unbehagen in der Kultur. In: Freud, G. Gesammelte Werke. 18 Bde. und Nachtragsband. London/ Frankfurt am Main, 7. Aufl., Frankfurt am Main, Bd. 14, Freud, A., Bibring, E., Hoffer, W., Kris, E., Isakower, O.(Hrsg.), S. 421 ff. (フロイト (2011) 「文化の中の居心地悪さ」 嶺秀樹・高田珠樹訳、『フロイト全集』編集委員：新宮一成・鷺田清一・道籐泰三・高田珠樹・須藤訓任、第20巻、岩波書店、65-162頁。)
- Friedeburg, L. v./Habermas, J.(Hrsg)(1983): Adorno-Konferenz 1983, Frankfurt am Main.
- Friesenhahn, G. J.(1985): Kritische Theorie und Pädagogik. Horkheimer, Adorno, Fromm, Marcuse, Berlin.
- Gaßen, H.(1978): Geisteswissenschaftliche Pädagogik auf dem Wege zu kritischer Theorie, Weinheim und Basel.
- Gebauer, G./ Wulf, Ch.(1992): Mimesis. Kultur - Kunst - Gesellschaft, Hamburg, S. 389-405.
- Groothoff, H.-H.(1971): Über Theodor Adornos Beitrag zur Pädagogik. In: Oppolzer, S. (Hrsg.): Erziehungswissenschaft 1971. Zwischen Herkunft und Zukunft der Gesellschaft, Wuppertal/Ratingen, S. 73-82.
- Groothoff, H. -H.(1987):Erziehung zur Mündigkeit bei Adorno und Habermas. In: Paffrath, F.-H.(Hrsg.): Kritische Theorie und Pädagogik der Gegenwart, S. 69-96.
- Gruschka, A.(1988): Negative Pädagogik. Einführung in die Pädagogik, Wetzlar.
- Gruschka, A.(1994): Bürgerliche Kälte und Pädagogik. Moral in Gesellschaft und Erziehung, Wetzlar.
- Gruschka, A.(1995): Adornos Relevanz für die Pädagogik. In: Schweppenhäuser, G. (Hrsg.): Soziologie im Spätkapitalismus. Zur Gesellschaftstheorie Theodor W. Adornos, Darmstadt, S. 88-116.
- Gruschka, A.(2004): Kritische Pädagogik nach Adorno. In: Gruschka, A./ Oevermann, U.(Hrsg.)(2004): Die Lebendigkeit der kritischen Gesellschaftstheorie. Dokumentation der Arbeitstagung aus Anlass des 100. Geburtstages von Theodor W. Adorno, 4. – 6. Juli 2003 an der Johann Wolfgang Goethe Universität, Frankfurt am Main, Wetzlar, S. 135-160.
- Gruschka, A.(2006): Pädagogische Aufklärung nach Adorno. In: Brumlik, M.(Hrsg.): Erziehungswissenschaft und Pädagogik in Frankfurt - eine Geschichte Portraits. 90 Jahre Johann Wolfgang Goethe Universität, Frankfurt am Main, S. 159-190.
- Gruschka, A./ Oevermann, U.(Hrsg.)(2004): Die Lebendigkeit der kritischen Gesellschaftstheorie. Dokumentation der Arbeitstagung aus Anlass des 100. Geburtstages von Theodor W. Adorno, 4. – 6. Juli 2003 an der Johann Wolfgang Goethe Universität, Frankfurt am Main, Wetzlar.
- Habermas, J.(1990): Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft. Frankfurt am Main (Neu Auflage). (ハーバーマース (1994) 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』 細谷貞雄・山田正行訳、未来社。)
- Habermas, J.(2005a): » Ich selber bin ja ein Stück Natur «—Adorno über die Naturverflochtenheit

- der Vernunft. Überlegungen zum Verhältnis von Freiheit und Unverfügbarkeit. In: Honneth, A. (Hrsg.)(2005): Dialektik der Freiheit. Frankfurter Adorno - Konferenz 2003, Frankfurt am Main, S. 13-40.
- Habermas, J.(2005b): Die Zukunft der menschlichen Natur. Auf dem Weg zu einer liberalen Eugenik? Frankfurt am Main (2002). (ハーバーマス (2004) 『人間の将来とバイオエシックス』 三島憲一訳、法政大学出版局。)
- Habermas, J.(2007): Das Sprachspiel verantwortlicher Urheberschaft und das Problem der Willensfreiheit: Wie last sich der epistemische Dualismus mit einem ontologischen Monismus versöhnen? In: Krüger, H. -P. (Hrsg.)(2007): Hirn als Subjekt? Philosophische Grenzfragen der Neurobiologie, Berlin, S. 263-304.
- Habermas, J.(2009a): Zwischen Naturalismus und Religion. Philosophische Aufsätze, Frankfurt am Main.
- Habermas, J.(2009b): Freiheit und Determinismus. In: Habermas, J.(2009): Zwischen Naturalismus und Religion. Philosophische Aufsätze, Frankfurt am Main, S. 155-186.
- Habermas, J./ Friedeburg, L. v./ Oehler, Ch./ Wetz, Fr.(1967): Student und Politik. Eine soziologische Untersuchung zum politischen Bewusstsein Frankfurter Studenten. 2. Aufl., Neuwied am Rhein.
- Hermann, B.(1978): Theodor W. Adorno. Seine Gesellschaftstheorie als ungeschriebene Erziehungslehre. Ansätze zu einer dialektischen Begründung der Pädagogik als Wissenschaft, Bonn.
- HGW: Hegel Gesammelte Werke, in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft. Rheinisch-Westfälische Akademie der Wissenschaften und der Künste(Hrsg.), Hamburg 1968 ff. (erscheint noch).
- Phänomenologie des Geistes. In: HGW Bd. 9. (ヘーゲル (1997a) 『精神現象学 (上)』 榎山欽四郎訳、平凡社。 / ヘーゲル (1997b) 『精神現象学 (下)』 榎山欽四郎訳、平凡社。)
- Hilbig, N.(1995): Mit Adorno Schule machen. Beiträge zu einer Pädagogik der Kritischen Theorie. Theorie und Praxis der Gewaltprävention, Bad Heilbrunn.
- Hinske, N.(Hrsg.)(1973): Was ist Aufklärung? Beiträge aus der Berlinischen Monatsschrift. Darmstadt.
- Hodek, J.(1977): Musikalisch-pädagogische Bewegung zwischen Demokratie und Faschismus. Zur Konkretisierung der Faschismus-Kritik Th. W. Adornos. Weinheim und Basel.
- Honneth, A.(2005): Verdinglichung. Eine anerkennungstheoretische Studie. Frankfurt am Main. (ホネット (2011) 『物象化——承認論からのアプローチ』 辰巳伸知・宮本真也訳、法政大学出版局。)
- Honneth, A. (Hrsg.)(2005): Dialektik der Freiheit. Frankfurter Adorno - Konferenz 2003, Frankfurt am Main.
- Hörisch, J.(1996): Kopf oder Zahl. Die Poesie des Geldes. Frankfurt am Main.
- Jäger, L.(2005): Adorno. Eine politische Biographie, München. (イエーガー (2007) 『アドルノ——政治的伝記』 大貫敦子・三島憲一訳、岩波書店。)
- Jay, M.(1973): The Dialectical Imaginations. A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950, Boston. (ジェイ, M. (1975) 『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史 1923-1950』 荒川幾男訳、みすず書房。)
- Kappner, H.-H.(1984): Die Bildungstheorie Adornos als Theorie der Erfahrung von Kunst und Kultur, Frankfurt am Main.
- Kelle, H.(1992): Die neuer Adorno-Rezeption in der Erziehungswissenschaft. In: Pädagogische Rundschau 46, S: 429-441.
- KGS: Kant's gesammelte Schriften (Akademie-Ausgabe). Königlich- Preußische Akademie der Wissenschaften (Hrsg.), 23 Bde. Berlin/ Leipzig 1902 ff.
- Klein, R./ Mahnkopf, C.-S. (Hrsg.) (1998): Mit den Ohren zu denken. Adornos Philosophie der Musik, Frankfurt am Main.
- Koinzer, Th.(2011): Auf der Suche nach der demokratischen Schule. Amerikafahrer, Kulturtransfer und Schulreform in der Bildungsreformära der Bundesrepublik Deutschland, Bad Heilbrunn.
- Kraushaar, W.(1998): Frankfurter Schule und Studentenbewegung. Von der Flaschenpost zum Molotowcocktail 1946 bis 1995. 3 Bände, Hamburg.

- Landesverband der Volkshochschulen von Nordrhein-Westfalen (Hrsg.) (1965): Zum Verhältnis von Aufstiegshoffnung und Bildungsinteresse, Dortmund.
- Marotzki, W./Sünker, H.(Hrsg.)(1992): Kritische Erziehungswissenschaft – Moderne – Postmoderne. Bd.1., Weinheim.
- Meseth, W.(2001): Theodor W. Adornos „Erziehung nach Auschwitz“. Ein pädagogisches Programm und seine Wirkung. In: Fechner, B./ Kößler, G./ Lieberz-Groß, T.(Hrsg.)(2001): »Erziehung nach Auschwitz« in der multikulturellen Gesellschaft. Pädagogische und soziologische Annäherungen. 2. Aufl., Weinheim/ München, S. 19 ff.
- Mollenhauer, K.(1987): Korrekturen am Bildungsbegriff? In: Zeitschrift für Pädagogik, 33. Jg. 1987, Nr.1, S. 1-20
- Müller-Doohm, S.(2003): Adorno. Eine Biographie, Frankfurt am Main. (ミユラー=ドーム (2007) 『アドルノ伝』 徳永恂監訳、作品社。)
- Naeher, J.(Hrsg.)(1984): Die Negative Dialektik Adornos. Einführung -Dialog. Opladen.
- Oevermann, U.(1983): Zur Sache. Die Bedeutung von Adornos methodologischem Selbstverständnis für die Begründung einer materialen soziologischen Strukturanalyse. In: Friedeburg, L. v./Habermas, J.(Hrsg.): Adorno-Konferenz 1983, Frankfurt am Main, S. 234-289.
- Paffrath, F.-H.(Hrsg.)(1987): Kritische Theorie und Pädagogik der Gegenwart, Aspekte und Perspektiven der Auseinandersetzung, Weinheim.
- Paffrath, F.-H.(1992): Die Wendung aufs Subjekt. Pädagogische Perspektiven im Werk Theodor W. Adornos, Weinheim.
- Peukert, H.(1983): Kritische Theorie und Pädagogik. In: Zeitschrift für Pädagogik, 29. Jg. 1983, Nr. 2, S.195-217.
- Piecha, D. u. Zedler, P.(1984): Die Erinnerung erziehen. Negative Dialektik und Erziehungswissenschaften. In: Naeher, J.(Hrsg.): Die Negative Dialektik Adornos. Einführung - Dialog. Opladen, S. 330-358.
- Pongratz, L.(1986): Zur Aporetik des Erfahrungsbegriff bei Th. W. Adorno. In: Philosophisches Jahrbuch, 93 Jg. 1986, 1. Halbband, S. 135-143.
- Pöggeler, F.(1987): „Erziehung nach Auschwitz“ als Fundamentalprinzip jeder zukünftigen Pädagogik. In: Paffrath, F.-H.(Hrsg.): Kritische Theorie und Pädagogik der Gegenwart, S. 54-68.
- Rose, G.(1978): The Melancholy Science. An Introduction to the Thought of Theodor W. Adorno. London/Basingstoke.
- Schäfer, A.(2004): Theodor W. Adorno. Ein pädagogisches Porträt, Weinheim.
- Schweppenhäuser, G.(1993): Ethik nach Auschwitz. Adornos negative Moralphilosophie. Hamburg.
- Schweppenhäuser, G./ Wischke, M. (Hrsg.)(1995): Impuls und Negativität. Ethik und Ästhetik bei Adorno. Hamburg / Berlin.
- Teschner, M.(1968): Politik und Gesellschaft im Unterricht. Eine soziologische Analyse der politischen Bildung an hessischen Gymnasien, Frankfurt am Main. (Frankfurter Beiträge zur Soziologie. 21.)
- Thyen, A.(1989): Negative Dialektik und Erfahrung. Frankfurt am Main.
- Welsch, W.(1990): Ästhetisches Denken, Stuttgart. (ヴェルシュ (1998) 『感性の思考——美的リアリティの変容』 小林信之訳、勁草書房。)
- Whitebook, J.(1995): Perversion and Utopia. Cambridge, Massachusetts. (ホワイトブック (1997) 『倒錯とユートピア』 桑子敏雄・鈴木美佐子訳、青土社。)
- Wulf, Ch./ Wagner, H.-J.(1987): Lebendige Erfahrung und Nicht-Identität. Die Aktualität Adornos für eine kritische Erziehungswissenschaft. In: Paffrath, F.-H.(Hrsg.): Kritische Theorie und Pädagogik der Gegenwart, S. 21-39.
- Wiggershaus, R.(2001): Die Frankfurter Schule. Geschichte, Theoretische Entwicklung, Politische Bedeutung, 6. Aufl., München.
- Ziege, E.-M.(2009): Antisemitismus und Gesellschaftstheorie. Die Frankfurter Schule im amerikanischen Exil, Frankfurt am Main.
- Žižek, S.(1994): The Metastases of Enjoyment. Six Essays on Woman and Causality, London/ New York. (ジジェク (1996) 『快樂の転移』 松浦俊輔・小野木明恵訳、青土社。)

<二次文献（邦語：主に本要約で言及したもの）>

- 池田全之（2015）『ベンヤミンの人間形成論——危機の思想と希望への眼差し』晃洋書房。
- 今井康雄（1985）「解放的教育学」小笠原道雄編『教育学における理論＝実践問題』学文社、115-138頁。
- 今井康雄（1998）『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想—メディアのなかの教育』世織書房。
- 今井康雄（2015）「『過去の克服』と教育——アドルノの場合 1959~1969」今井康雄『メディア・美・教育——現代ドイツ教育思想史の試み』東京大学出版会、353-388頁。
- ウートラム（2017）『啓蒙』田中秀夫・逸見修二訳、法政大学出版局。
- 表弘一郎（2013）『アドルノの社会理論——循環と偶然性』白澤社。
- 近藤孝弘（2005）『ドイツの政治教育——成熟した民主社会への課題』岩波書店。
- シュママ（1995）『精神分析事典』弘文堂。
- 白銀夏樹（2011）「教育学におけるアドルノ研究の動向について」『広島文化学園大学学芸学部紀要』創刊号、41-52頁。
- 白銀夏樹（2015）「道德教育における自律という課題——アドルノにおける道德哲学と教育」教育哲学会『教育哲学研究』第112号、55-73頁。
- 白銀夏樹（2017）「アドルノの教育思想——自然と啓蒙の概念をめぐって」教育思想史学会『近代教育フォーラム』第26号、31-41頁。
- 関根宏朗・尾崎博美・小山裕樹・櫻井欽・宮寺晃夫・下司晶（2012）「教育学的『自律』概念の再検討」教育思想史学会『近代教育フォーラム』第21号、209-221頁。
- 竹峰義和（2007）『アドルノ、複製技術へのまなざし——〈知覚〉のアクチュアリティ』青弓社。
- 龍村あや子（1994）「アドルノのマーラー論に見る逆説的表現——〈破綻〉と〈叙事詩的時間〉をめぐって」三光長治ほか『思索する耳——ワーグナーとドイツ近代』同学社、211-229頁。
- 仲正昌樹（1999）「〈同一性〉の起源をめぐって——アドルノの認識論批判とゾーン＝レーテルの〈貨幣＝存在〉論」『フランクフルト学派の今を読む』情況出版、118-133頁。
- 野平慎二（1997）「現代における人間形成と『美的なもの』——『ポストモダン』と『未完の近代』の間——」教育哲学会『教育哲学研究』第76号、124-137頁。
- 野平慎二（2004）「啓蒙をめぐるハーバーマスとフーコー——人間形成の潜在的な条件としてのコミュニケーション的關係」『富山大学教育学部紀要』第58号、27-38頁。
- フーコー（2002a）「啓蒙とは何か」石田英敬訳、蓮實重彦・渡辺守章監修『ミシェル・フーコー思考集成X——倫理・道德・啓蒙』筑摩書房、3-25頁。
- フーコー（2002b）「カントについての講義」小林康夫訳、蓮實重彦・渡辺守章監修『ミシェル・フーコー思考集成X——倫理・道德・啓蒙』筑摩書房、172-184頁。
- 矢野智司（2000）『自己変容という物語——生成、贈与、教育』金子書房。
- 山口匡（2005）「Wie kultiviere ich die Freiheit be idem Zwange? ——カント『教育学』における内在的解釈の視点」『愛知教育大学研究報告』第54巻（教育科学編）、91-98頁。
- 山名淳（2015）『都市とアーキテクチャの教育思想——保護と人間形成のあいだ』勁草書房。

※ 邦語以外の文献からの引用箇所は、用語の統一をはかることなどを意図して引用者が翻訳したものであるが、すでに邦語訳のあるものは適宜参考にさせていただいた。また [ ]は出典および参考文献を、〔 〕は引用者による補足などを示した。